

日の躍るのを見ながら無矢見に唱歌を唸り、出鱈目をやつては獨りて高笑しながらまた影をつける、また干す、またぬる、乾をかく、他の色に比較して調色する、まづこれで一通は濟んだが、右から見ても左から見てもどうも面白くない、極く弱い調子で丁度病氣？畫に病氣とは少し可笑しいが、僕のは全くそれにかかつた、ののやうだ、また、塗つたがどうも顔かれぬ、あゝ、此の時の予の落膽はどれ位であつたらう、暫は、川となく、岸となく茫然と見つめた、「あゝ不快だ」と投げ出すやうに云つたが仕様がある筈もないから、こんどは自暴半分に、「ナニ糞？」と眩やきながら大膽に蔭をつけ始める、日向に強い彩色する、ホロイトを混ぜて幹をやる、まづいいと急いで筆を持つたまま、距れて見た、「ああ、いい！」予は思はず叫んだ、そして突然畫を捧げてそこら近邊を歩いて見た、

畫としては、硬い採り處もないこのスケッチ、然し予はこれを得て更に新しい希望に満ち、進むべき勇氣を起した。

畫に志せし動機

金 羽 生

水彩畫揮毫求めに應ず。と神戸再度道の或家に掛けてある看板を見て、水彩畫とは何の様な繪かと、不審を起したのは、明治三十五年丁度私が十五歳の時でした。

其後播州垂水の旅宿で、青年界といふ雑誌の口繪に、三宅先生の朝といふ題の圖が出てゐたのを見たのが、抑も私が水彩畫に興味をもつた初めてでした。

昨年新聞紙上で『みづゑ』といふのがあるを知つて、買求めたのがその第七である。

初めは見るのを樂みとしてゐたのが、遂に自ら畫かうといふ謀叛を起した、その動機といふのは、一日友人大村翠屋と共に、湊川の畔を逍遙した時である。蒼鬱たる老松の綠滴るが如き、攝播の連山摸糊として霞みたる、脚下の水はよどみて靜に流るゝ様など、この雨後の景は痛く二人の心を動かしました。

爾來二人は鉛筆畫の初歩より練習をします。ここ數年後には稍繪らしい繪が畫けやうかと、それを樂みにやつてゐます。

水彩畫修業より得たる利益

山 脇 化 龍

水彩畫階梯に「意を密にして筆を粗にせよ」といふ語があります、私は畫をかく毎に常にこの語を口ずさんでをりますが、非常に面白い語だと思つて、今は繪畫以外、處世修養の上にも適用してをります。細かい所までよく氣を配つてしかも大局を看取するといふのがこの語の眞意でせう。眼前の小利益、小愉快に目がくらんで永遠の策をたてることを忘れたり、讀書するにしても、部分々に力を入れて、其主旨とするところを知らずにゐる等は、この箴に背いてをります。

* * * * *